



北海道初、ホームホスピス誕生

月寒神社の由緒を調べてみると、明治時代に広島県出身の移住者が、厳島神社の御分霊と稻荷神をお祀りし、建立したのははじまりです。また、月寒(当時はつきさなつぶ)村の行政区域は、現在の北広島市の一部を含むなど、昔から広島県とゆかりの深い地域です。



①ホームホスピス「やっちゃん」の2階洋室。東と南、西日も入り、冬でも温かい部屋。窓からは、子どもたちが遊ぶ姿も見える。
②1階の和室2部屋。間仕切りのふすまを開け撮影したシーン。現在、お2人の女性が別の2室を利用中。

半澤博恵さん

一般社団法人ホームホスピスばらのおうち 代表理事

北海道初！もうひとつの我が家 ホームホスピスやっちゃんは 共に、友として、あづましく暮らす家。



法人イラスト/三色のばら
●オレンジ(やっちゃん)
…………絆・信頼・健やかさ
●ピンク(訪問介護)
…………温かな心・感謝
●ブルー(訪問看護)
…………奇跡・夢が叶う



地域の拠点としての機能も果たし、若い人も編み物や料理で関わってくれている。

北海道初となるホームホスピスやっちゃん(2025年11月1日開所)が位置する現豊平区月寒東の住宅にある一般社団法人ホームホスピスばらのおうちの代表理事、半澤博恵さんを訪ね、ホームホスピスと、ここに至るまでの道のりを伺いました。「この辺りって広島県から開拓に入られた土地柄のようです。このお家のルーツもそうで、広島県出身のおじいちゃんとおばあちゃんが結婚され築かれた一族の歴史が流れていて、ご親族もたくさん、ご近所にお住まいです。譲り受けたこの住宅はおばあちゃん系の血筋とお聞きしましたが、地域とともにあるホームホスピスは、そういう歴史やこのお家の暮らしを引き継ぐことを大切に、一つの家として月寒の仲間入りをさせてもらいました。

まさにそうで、ここに住まわれていたお母さんの呼称からいただきました。一緒に生活されていた娘さんから『この土地と家に強い思い入れがある』と呼ぶ人は、もうこの世にいないけれども、その名前を使ってくれたら母が喜ぶと思います』そう言ってくれたからなのです。医療や介護の世界でホスピス(派生言語がホスピタル病院)という言葉が使われたのは、ホスピス・緩和ケア病棟がはじまりのようです。いわゆる治療困難な疾患(末期がんなど)を抱える患者さんを対象とした終末医療というイメージが先行したため、ホームホスピスという言葉にも、看取りの家、終の住処、とい

うような響きを連想しますが、半澤さんによると、その解釈は狭いようです。「確かに、人生の最期に寄り添うことも私たちの使命の一つではありますが。しかし、ホームホスピスで大切にしていることは、その人が最期まで自分らしくいられること。ここをもうひとつの我が家として入居者やスタッフもみんな友として、家族の一員として、あづましく暮らしてほしいと思うのです。家に帰りたい人が、我が家のような雰囲気や、やっちゃん、で最期の時を迎える瞬間まで、あづましく暮らしてもらおう、これが私の目標であり理想なのです。住宅街にある一軒家で5、6人が

ともに暮らす家ですから、当然、さまざまな生活音が聞こえます。調理のコトコトとした音、廊下をドタドタ歩く音。ご飯の炊ける匂い、庭で育つ季節の草花を愛でたり手入れをしたり。その一方でお互いの尊厳が大切に守られ、体調が思わしくない時は心配し合い、寄り合う、そんな優しい時間が流れる空間でありたいのです。ホームホスピスは、病い、障がい、年齢、性別を問わず、受け入れることができず、一人暮らしが難しい方、介護者が高齢や就労のための自宅介護が難しい方、医療的ケアの支援が必要で自宅での暮らしが難しい方など、個々の事情に応じてご入居していただけます。

地域活動としてNPO法人「ねっこぼこのいえ」の相談員、シオン広場で「暮らしの保健室ほまほま」等を担当している。



あづましく暮らしてほしい。

ホームホスピスに至る道のり

「ずっとこういう小規模な家で、家族的な支援をしたいと思っていました。それを求めて、過去には訪問介護と訪問看護、定期巡回型訪問介護看護、小規模多機能型事業所、サ高住なども経験しましたが、いざ法律に照らして見ると、できないことが多いことや、永続的なサービスができず途中で終わってしまった。その後、これまでの仕事にひと区切りをつけた時、前々から気になっていたホームホスピスを勉強しようと思いい、2020年(コロナ禍と重なる最中)に日本財団在宅ホスピス実践リーダー養成プログラムの研修を受講することにしました。

「私は3歳まで浜頓別町で暮らしましたが、母親の里帰り出産によって、利尻島で生まれおちりました。利尻島の病院には忘れられない思い出があります。あれは小学4年の時でしたが、大好きだった曾祖母の臨終に立ち会った時のことでした。ベッドの周りに親族が集まって、私も声をかけながらその時を迎えました。不思議と人の死が怖いと思わなかったのです。むしろ幸せな時間でした。明治生まれの曾祖母の看取りは、今思い出しても胸を温かくしてくれます」

「原点は利尻島での曾祖母の死」

「原点は利尻島での曾祖母の死」

「さーっとこういう小規模な家で、家族的な支援をしたいと思っていました。それを求めて、過去には訪問介護と訪問看護、定期巡回型訪問介護看護、小規模多機能型事業所、サ高住なども経験しましたが、いざ法律に照らして見ると、できないことが多いことや、永続的なサービスができず途中で終わってしまった。その後、これまでの仕事にひと区切りをつけた時、前々から気になっていたホームホスピスを勉強しようと思いい、2020年(コロナ禍と重なる最中)に日本財団在宅ホスピス実践リーダー養成プログラムの研修を受講することにしました。ホームホスピスは2004年に宮崎県宮崎市の『かあさんの家』から始まり、現在は全国ホームホスピス協会が事務局になっています。私は『神戸なごみの家』に5ヶ月、宮崎

「原点は利尻島での曾祖母の死」

「原点は利尻島での曾祖母の死」

車椅子のまま移動できる十分なスペースを確保したトイレと洗面台。

大きなバスルーム。いくつかの手すりは、業者さんからのプレゼント。

正面に見えるのがエレベーター。改修工事により設置。

玄関アプローチの左に見えているのが外出用車椅子のための昇降機。

いつも笑顔と笑い声が絶えないリビング。テレビの上のスタンドグラスは前所有者の手作り。ホームホスピスには時間割がなく、食事や起床・就寝時間も個人の意志が尊重される。



Company Profile

一般社団法人 ホームホスピスばらのおうち
札幌市豊平区月寒東2条5丁目11番18号 ©011-859-1118
■事業/ホームホスピスやっちゃん、あづまし家ヘルパーステーション(訪問介護)、あづまし家ナースステーション(訪問看護)
■設立/2023年12月19日 ■従業員/看護師6名、介護士4人、暮らしのサポーター1人(2026年2月20日現在)

Personal Profile

介護福祉士・看護師 半澤 博恵さん
1971年5月3日生まれ。宗谷地方出身。高校進学時から札幌市に転居。専門学校卒業後、介護福祉士として脳外科病院に勤務。その後、介護老人福祉施設・訪問看護・サ高住(サービス付き高齢者向け住宅)・訪問介護・定期巡回型訪問介護看護・小規模多機能型事業所で介護と看護業務、管理者を歴任。2023年12月、一般社団法人ホームホスピスばらのおうちを設立し代表理事に就任。